



## は じ め に

神社・神道への関心が国内外で広がっています。

神社を中心とした神域が世界遺産とされたり、特別な力に満ちた場所として、多くの老若男女が神社を訪れるようになってきました。こうした現象には物見遊山的な光景もみられますが、底流には日本固有の信仰としての神道と、神道を通したアイデンティティの模索や原初への回帰とでもいった関心が含まれているように思います。また、神道に根ざしたライフスタイルや思想が、グローバリゼーションの進む世界の中で、注目される機会が増えてきました。

書店には、多くの神道の入門書、概説書が並んでいます。著名な神社の由緒由来、神々の名前や神話の説明が中心のようです。本書は、こうした入門書とはまったく異なったものとして企画されました。本書は、神社・神道へアプローチしていくための学問的方法を提示しようとしています。本書の目次を見ればおわかりのように、祭祀学、祭式行事作法など、これまでに見たことのない学問領域が示されています。また、神道の歴史についても、ただ時系列に神社・神道を取り上げているのではありません。それぞれの時代のあり方をどのように考察するのか、といった眼差しが貫徹しています。関連諸学も含めて、神社・神道への多様なアプローチを学んでいただければと思います。

本書はあくまでも導入教育のために作成されています。関心を持った人は、より詳しい入門書や、各論を扱った専門書を手にとってみてください。

それでは神道学の世界にご案内いたしましょう。

編 者



アキラくん

東京にある大学の2年生。経済学部に所属しています。地方都市の出身で、両親、妹、祖母の五人家族です。住んでいる地域の氏神様のお祭りでは、小さい頃から山車を曳いたり御輿を担ぐなどしてきましたが、あらためて神社や神道とは何か、ということを考えたいと思っています。



マリエさん

東京にある大学の1年生。所属は文学部です。英文学を勉強しています。東京生まれの東京育ちで、家には神棚も仏壇もありません。最近、パワースポットや世界遺産の特集に神社が数多く取り上げられていて、神社や神道に興味を持ちました。婚活にも効果があるかしら、と期待しています。



講師

神道史を専門領域とする研究者。奥さんと子ども二人の四人家族。神道を研究すればするほど、その広がりや深さに気づき、いっそうの研鑽を積まなければと自戒しています。

## 本書の使い方

### 学習のポイント

各章のはじめに、この章で学ぶ主なテーマを列挙します。

### 講義の前に

アキラくんとマリエさん、そして講師が各章のテーマをめぐって問題意識や関心を深めていきます。

### 講義のあとで

### 本文

講義の部分です。  
各テーマの説明と、どう解釈するかといった分析の部分からなりたっています。  
欄外には、コラムや写真など、学習を助けるための資料が記載されています。

### ワーク・課題

各章のテーマに関する問題について、ワークや課題が与えられています。自分で解答してみましょう。課題のための簡単な解答例やヒントが巻末に載っています。参考にしてください。

### はみだしコラム

神道の格言を載せてあります。勉強や人生に役立ててください。

はじめに  
本書の使い方

第1章 ● 神道を学ぶということ 6

## I 神道の古典を読む

第2章 ● 神々の物語—『古事記』の世界 武田秀章 10

第3章 ● <sup>ことだま</sup>言<sup>さき</sup>霊の幸わう国—古典から読み解く古代人の神道観 松本久史 26

## II 神道の歴史を探る

第4章 ● 古代—神道の源流と古代国家 笹生 衛 38

第5章 ● 中世—神道の変奏 岡田莊司 50

第6章 ● 近世—天下泰平と古儀復興 西岡和彦 62

第7章 ● 明治以降—近代に向きあう神と日本人 松本久史 74

## III 神道と祭り

第8章 ● 神社の祭り—祭祀学 中西正幸 88

第9章 ● イエ・ムラ(サト)・マチの祭り—風土を祭りで意味づける 茂木 栄 100

第10章 ● 祭りの作法—神社祭式行事作法 茂木貞純 112

第11章 ● 祭りの備え—有職故実 星野光樹 124

第12章 ● 研究領域と関連諸学—神道研究の広がり  
石井研士・茂木栄・黒崎浩行・藤本頼生 140

## 付録

神系譜 155

中つ国の神話—日本建国以降 156

境内配置図 159

神社建築 160

課題の解答とヒント 162

索引 164

# 第1章

## 神道を学ぶとどうなるの

### 本書での神道の学び方

神道は、一般的には**日本古来の固有の民族宗教**といわれています。しかし、宗教というよりももっと広い日本人の生活様式や考え方の奥深くに存在し続けてきた、日本や日本人のアイデンティティと深く結び付いたものともいえるでしょう。その形態は、長い歴史の中で、それぞれの風土によって変化を遂げ、また仏教や儒教などの影響も受けて、多様な姿を見せながら今日にいたっています。仏教やキリスト教と違って、神道には教典・教義がなく、神道の核となるところは、自分自身の生き方によって作り上げる、また感じていく「あるもの」なのかもしれません。ですから、誰かが「これが神道だ」と書いてみても、万人を納得させるようなものは困難でしょう。

本書は、そうした神道に、どのようなアプローチが可能なのか、これから神道のことを学んでみたいと思っている方々に、見取り図を提供しようとするものです。本書が神道という大海原を渡っていくための有用な海図になることを願っています。

この章では、神道に関する基本的な概念や歴史を扱いながら説明していきますが、自分で関心を持って、辞典類や参考文献を利用しながら、さらにその先の勉強に向かっていってほしいと思っています。

### 「神」とはなにか

まず最初に、神道を考えるとき、その中心となり、欠かせない存在は**神**です。「神」という文字は漢字ですが、私たちはそれを**カミ**と読みます。明治以降は、キリスト教の **God** も「神」と翻訳されるようになり、現在の私たちにはその印象も強く刻み込まれていますが、外来語の概念としての「神」の語源を探ることではなく、「カミ」とは何かということを理解しなければなりません。

尊い存在を示す**上**<sup>かみ</sup>が語源であると、長い間考えられてきましたが、現在では、目には見えない何らかの存在を示す言葉であったのではないかと考えられています。歴史的には仏教の影響により、仏が仏法を広めるために神として仮の姿であらわれたのだという**本地垂迹説**<sup>ほんじすいじやくせつ</sup>が長い間信じられてきましたが、近世の国学者、**本居宣長**（1730～1801）はそうした外来思想の影響を受ける以前の神について考え、計り知れない不思議な力を持った存在が「カミ」なのだと思えるようになりました。みなさんも本書を読み、勉強することで

宣長のように「カミ」についての理解を深めていってください。

## 国学と皇学

近世（江戸時代）になると、『古事記』や『日本書紀』に記載された神々や、神社の祭神や祭祀について、外来宗教・思想の影響を排除して、主体的・自覚的に考察していく学問が現れました。これが現在の神道学の直接的なルーツです。この学問は**神学**、もしくは**国学**などと呼ばれ、神仏習合の立場から説かれていたことが多かったそれまでの神道についての認識を大きく改めました。さらに幕末期にはペリー来航による対外危機が生じるとともに<sup>そののう</sup>尊皇思想が高揚し、「皇国」（天皇の統治する国家）の学問という意味で**皇学**という名称も広く用いられるようになり、「国学」とほぼ同じような意味でつかわれるようになります。現在、神道を学ぶ専門の学部や学科のある國學院大學、および皇學館大学の名称もこのような「国学」、「皇学」に由来しているのです。

## 神道学の学問領域

本書では、さまざまな視点から複雑で多様な神道を学んでいきますが、始めるに当たって、その主要な学問領域について、簡単に説明します。

「神道とは何か、神とはどういう存在か、その働きとはどのようなものか」といった問いには、他の諸宗教と比較して特徴を明らかにするといった客観的な方法も可能ですが、神道信仰を持つ者が理性的論理的に明らかにすることもできます。こうした学問を**神道神学**といいます。

神道の原初形態は必ずしも社殿を伴うものではありませんが、神道が神社という祭祀の場によって維持・発展してきたことは明らかです。また、朝廷や幕府などによって神社は尊重されてきました。こうした神社の歴史的な展開や制度の変遷を中心に学ぶ分野が**神社史**です。

また、神道には多くの流派や学派があり、神とは何か、教えとしての神道とは何かということを考え、人々に説いてきました。これらの教えや思想を解明していくのが**神道思想史**です。このなかには、一般的に教義や教典をもたない神道に対して創唱宗教的要素が強い、近代になって発展した教派神道、具体的には戦前の神道十三派や、神道系新宗教の教団の研究も含まれています。

神社信仰の中心は**祭り**であり、それに必要不可欠な祭器や装束、調度など

があります。それらを研究するのが**祭祀学**や**有職故実**研究です。また、神社以外にも神に対する信仰や祭りは幅広く存在します。宮中で行われている皇室祭祀の研究や、庶民の日常生活での神や祭りのあり方を、民俗学などからアプローチする研究もあります。

## 本書の構成

本書は大きく、**I 神道の古典を読む**、**II 神道の歴史を探る**、**III 神道と祭り**の三部構成になっています。内容に関しては、それぞれのパートで理解してほしいと思いますが、ここではたんに読んで理解するだけでなく、実際にやってみることの重要性を指摘しておきたいと思います。

第3章の「言霊ことだまの幸さきわう国—古典から読み解く古代人の神道観のりと」で祝詞について説明されていますが、祝詞は実際に声を出して読むものです。祝詞の一種である中臣なかとみの祓はらえ（大祓おおはらえ詞の中世的形態）は、唱えれば唱えるほどよいとして、千度祓、万度祓が行われました。たとえば、インターネットの動画サイトには大祓詞が投稿されていますので、ぜひ自分でも唱えてみてください。また、第10章「祭りの作法—神社祭式行事作法」では参拝作法が説明されています。説明を読んだ上で、実際に神社へ足を運んで正式な参拝を試みてください。拝はいと深揖しんゆう、小揖しょうゆうの違いを身をもって体験してほしいと思います。

冒頭で述べたように、自らが神道と向き合うために、神社や神道に触れる機会を作ってください。第4章「古代—神道の源流と古代国家」を読んで、実際の遺跡を見に行くのもいいでしょうし、近くの氏神様や旅先で由緒ある神社を参拝して、学んだ知識を活かしてください。

## 神道を学ぶための基礎的文献解題

神道に教義や教典はないと説明しましたが、神道に関する文献は少なくありません。以下に最低限の必読書としての古典を挙げておきます。また、これから本書を読み進める上で必要な辞典・事典も列挙します。インターネット上の情報ではなく、きちんとした知識をもとにして学んでください。

## 古典を読もう

## 『古事記』 角川文庫ソフィア文庫ビギナーズクラシックス 角川書店 2002

現存する日本最古の書物『古事記』の主要な神話のエピソードをピックアップし、現代語訳と原文を対比してみるができます。

## 大倉山精神文化研究所編『神典』 大倉山精神文化研究所 1936

『神典』には、『古事記』をはじめ、『古語拾遺』、『宣命（統日本紀抄）』、『延喜式（抄）』、『風土記』など、神道の基本的な文献が網羅されています。現在は入手が困難になっていますが、図書館などで探してみてください。

辞典・事典を  
使おう

## 下中弥三郎編『神道大辞典』 平凡社 1937（縮刷版 臨川書店 1986）

元版は項目数 18000 からなる全三巻の神道に関する百科事典。神名、神社、祭祀、祭器具、行事、神道学説、神道書籍、神道用語、神社建築など、神道にかかわる用語が網羅されています。神道に関しては、もっとも詳しい辞典です。

## 國學院大學日本文化研究所編『神道事典』 弘文堂 1994（縮刷版 1999）

神道の歴史と現状について、体系的にわかりやすく構成された事典。全体を九部、神、制度・機関・行政、神社、まつり、信仰形態、基本観念と教学、流派・教団と人物、神道文献にわけ、それぞれの冒頭に全体像を把握するための概説が付され、用語解説と参考文献が記載されています。また写真や図表類、神社一覧、記紀神系譜、記紀神名対照表、文献一覧、年表など豊富な資料が掲載されています。

## 藺田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』 吉川弘文館 2004

『国史大辞典』から選択した 2800 項目に、新たに 1300 項目を加えて構成された、神話の世界から現代までを扱った辞典。神仏習合史関連項目が多く採用されています。付編として、官国幣社一覧、府県社一覧、海外神社一覧、神社統計表、神社規則が掲載されています。

## 『日本神名辞典』 神社新報社 1994（増補改訂版 2001）

『古事記』『日本書紀』その他の古典に記載された神々、全国著名神社の祭神、歴代天皇、義人・地方神などを集めた辞典。神名を五十音順に排列し、表記、読み、解説、出典資料名が記載されています。



## ●表記についての凡例

通読の便を図るため、以下の表記とした。

- ・漢字については常用漢字などの通行の字体を原則として用い、仮名遣いは引用等を除き現代仮名遣いとした。
- ・年号については、西暦・元号の順に併記した。海外に係る事項については西暦のみの表記とした箇所もある。
- ・神名の読みについては、原則として『神道事典』（國學院大學日本文化研究所編 弘文堂）の表記に従った。

## 第2章

# 神々の物語

『古事記』の世界

武田  
秀章

### 講義の前に

世界のさまざまな民族や文化は、それぞれの神話を伝えてきました。ユダヤ・キリスト教の神話、ギリシャの神話、ポリネシアの神話など、各地の人々は、「この世界はどのようにして始まったのか」「自分たちはどこから来て、どこへ行くのか」等々の「永遠の問いかけ」について解き明かす「神々の物語=神話」を、アルカイックな想像力を羽ばたかせながら語り伝えたのです。



日本の神話といえば『古事記』と『日本書紀』ですね。神話って、現実にはあり得ないような物語なので、どのように解釈すればいいかわかりません。



『古事記』と『日本書紀』の神代巻は、国の成り立ちを伝える神話です。もちろん神話は歴史上の「事実」ではありません。しかし私たちは、神話を通じて「古代の人々はこの国の起源をどう考えていたのか」「古代の人々はこの国にどのような夢や理想を抱いていたのか」など、私たちの先祖にとっての大切な「真実」を知ることができるのです。



「事実」ではないけれど「真実」であるっておもしろい考え方ですね。でも、具体的にどんな物語なのかはほとんど知りません。



#### 学習のポイント

- ★「神話」とは何かを理解する。
- ★『古事記』『日本書紀』の成り立ちを理解する。
- ★主だった神様の名前とそのエピソードを理解する。





日本の神話は、従来、教育をはじめとする社会の公の場から締め出されてきました。しかし、このところ、そうした頑なな態度を反省し、わが国の神話について見直そうという動きがあちこちで起こっています。そうした動向の上に乗って、平成23年度から、小学校の国語の教科書で『古事記』の神話（「やまたのおろち」や「<sup>いなほ</sup>因幡のしろうさぎ」）が取り上げられることになりました。

じゃあ、大学生や大人が知らないのはちょっと恥ずかしいですね。でも、なぜ今になって日本の神話を学ぼうという気運が起って来たのでしょうか。



自分の国の神話なのですから、まったく知らないのも不自然な話ですよ。でももっと大きな理由は、ますます進む国際化の中で、「もう一度日本の根っこを見つめ直したい」という人々の思いが深まって来たからではないでしょうか。

そういえば、外国人の友だちに「日本人の精神的なよりどころはなんなのか」と聞かれて、答えられなかったことがあります。



人は誰しも「自分らしく生きたい」と思っています。同じように、人は自分の母国に対しても、「自分の国らしくあってほしい」と願っているのではないのでしょうか。そのような「日本らしさ」の根っこにあるのが、国のおこりを語り伝える神話なのです。「自分らしく」「日本人らしく」生きるために、われわれの根っこにある神話の語り伝えに、あらためて耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

## 『古事記』と『日本書紀』

日本の神話は、『古事記』と『日本書紀』に収められています。『古事記』『日本書紀』の成立は、古代における統一国家形成という出来事と深く結びついていました。

7世紀から8世紀にかけて、日本列島においては、それまでの緩やかな豪族連合国家に代わって、天皇を戴く中央集権国家（律令国家）の形成が模索されていきました。わが国の君主の称号である「天皇」号、独自の国号「日本」が定められたのも、この時期であるとされます。

とりわけ第40代の天武天皇は、古代国家の確立を力強く推進しました。『古事記』の序文（正確には上表文）によれば、天武天皇は次のような念願をもたれていました。

「われわれの祖先の系譜や伝承が混乱し、その本旨が見失われようとしている。これらは国の成り立ちを示す大切な伝えである。ぜひとも後世に正しく語り残さなければならない」。

こうして天皇のお側に仕えていた舎人の稗田阿礼が、古来のやまとことばをもって神々の物語を語り伝えたのです。

平城遷都ののち、天武天皇の念願を受け継いだ第43代元明天皇の時代に、『古事記』全3巻が完成しました（上巻が神代巻）。学殖豊かな太安万侶が、稗田阿礼の「やまとことば」の語りを仔細に筆録し、712年（和銅5）、元明天皇に献上したのです。こうして天武天皇の悲願を受け継いだ『古事記』は、今から1300年近くも昔に成立した、現存するわが国最古の書物です。『古事記』の神話においては、健やかでみずみずしい古代日本人のころ（やまところ）が、古来の「やまとことば」によって、生き生きと語られているのです。

『古事記』に続いて、第44代元正天皇の時代に、『日本書紀』も完成しました。『日本書紀』は、皇族の重鎮であった舎人親王を総裁に戴き、内外の資料を広く集め、全30巻から成る国家の正史としてまとめられました。『日本書紀』は、第1巻と第2巻に神話（「神代」上・下）を収め、第3巻以降は初代神武天皇から第41代持統天皇までの出来事が、漢文体・編年体（中国のスタンダードな「正史」の叙述スタイル）の様式で記されています。

同胞に向けた「やまとことばの物語」としての『古事記』。当時の東アジア世界スタンダードの「歴史書」としての『日本書紀』。古代の日本は、国の成



『古事記』上巻

筆者は近世初期の吉田神道を代表する神龍院梵舜（1553～1632）。『古事記』の写本は『日本書紀』などと比べると数が少なく、中世以来ト部（吉田）家に伝来された系統の写本である。〔國學院大學図書館蔵〕

り立ちを伝えるものとして、根を同じくしながらも、その性格が異なるふたつの古典を遺してくれたのです。そこには、われわれの祖先の、日本の国柄についての深い理解と、子孫に向けた周到な配慮が示されている、と言えるのではないのでしょうか。



本居宣長 1730~1801  
江戸中期の国学者。伊勢国松阪に生まれる。代表作は『古事記伝』『玉勝間』など多数。門人は鈴屋門と呼ばれ全国に広がった。

## ●本居宣長による『古事記』の復活

『日本書紀』は、完成以来、朝廷で公の研究會が続けられ、その後も一貫して国家の「正史」として重んじられてきました。しかし一方の『古事記』は、ほとんど顧みられることなく、長く忘れ去られていました。

しかし江戸時代に入って、国学者の<sup>もとおりのりなが</sup>本居宣長が、『古事記』の訓読と注解に生涯を捧げ、ついに大著『古事記伝』(全44巻)をまとめ上げました。宣長の努力によって、『古事記』は千年の眠りから目覚め、神々の息吹を伝える書

## COLUMN

### 「三大神勅」とは？

『日本書紀』では、<sup>にぎのみこと</sup>瓊瓊杵尊が地上に降る際、天照大御神が3つの<sup>しんちよく</sup>神勅(お言いつけ)を授けられたことが伝えられています。これらは三大神勅と呼ばれ、日本神話の理念を集約するメッセージとして重んじられてきました。三大神勅とは、(1)天壤無窮の神勅、<sup>ほうきようほうさい</sup>(2)宝鏡奉斎の神勅、<sup>ゆにわ いなほ</sup>(3)斎庭の稲穂の神勅です。

(1) **天壤無窮の神勅**は、『日本書紀』天孫降臨段の第一の一書に伝えられています。

「豊葦原千五百秋瑞穂国は、わが子孫の王たるべき地なり。<sup>いましづめまゆ</sup>爾皇孫就きて治らせ。さきくませ。宝<sup>あまつつぎ</sup>祚の隆えまさんこと、まさに天壤とともに窮<sup>あめつち</sup>り無<sup>きわま</sup>けむ」(豊葦原千五百秋瑞穂国は、わが子孫が君主として治めるべき国土です。わが子よ、行って治めなさい。さあ、出発しなさい。皇室の繁栄は、天地とともに永遠に続き、窮まることはないでしょう)。この神勅には、「わが国においては、天照大御神の子孫が永遠に君臨すべき大原則が、大御神ご自身によって、神代のはじめから定められ、約束されている」という信仰が示されています。

(2) **宝鏡奉斎の神勅**は、同段第二の一書に伝えられています。「吾が児、この宝鏡を視まさむこと、まさに吾を視るがごとくすべし。与<sup>とも</sup>に床を同じくし殿を共にして斎<sup>いわた</sup>いの鏡となすべし」(わが子孫よ、この鏡を私と思いなさい。この鏡を皇居に祀り、「み鏡の祭り」を受け継いでいきなさい)。

この神勅には、「私の子孫は、み鏡の祭り主として、天下泰平と五穀豊穰を祈り続けていきなさい」という大御神の思召しが示されています。伊勢の神宮、皇居の賢所における「み鏡の祭り」の根源とされる神勅です。

(3) **斎庭の稲穂の神勅**も同じく一書の伝えです。「吾が高天原に<sup>まか</sup>御しめす斎庭の穂を以て、また吾が児に御せまつるべし」(私が高天原で育てた神聖な田んぼの稲穂を、わが子孫に授けましょう)。ここには、わが国の稲作りが、天上の天照大御神の稲穂に由来するとの信仰が示されています。「水穂の国」としてのわが国のおこりを伝える神勅です。